中世都市カンブレー前史の一考察

守　山　記　生*

A Study on the Early History of Cambrai, One of Medieval Cities

Norio MORIYAMA

(1975年9月25日受理)

(1)

中世都市の形成史において，1077年，カンブレー(Cambrai)に起きたコミューン運動は，最も古い時期に属するのは周知のことである．この政治運動は，他都市のコミューン運動には殆んど見られない過激な闘争形態をとったけれども，商人ら住民による平和を求める防衛組織を実現する誓約団体の結成を通じて，カンブレー自体の都市史に一時期を画した．更に，この運動が，周辺のコミューン運動の発火点として広汎な反響を及ぼしたことは，それなりに歴史的な評価に値するものである[1]．

しかし，この運動が直接の原因はともかく典型的に都市タイプの政治闘争を展開し得た基盤は，一朝一夕に出来たのではなく，長期に及ぶ過程を経て形成されたものである．その際，司教の都市的形成力が大いに注目される．以下では，コミューン運動期を迎えるまでのカンブレーについて考えてみたい．

(2)

カンブレーは，ローマ帝政末期の4世紀半ば頃に，Camaracum と称して初めて記録に現われる．400年頃までには，ローマの属州ベルギカ第二州において中位の重要性を有する行政中心地であった．他のガロ・ローマ都市と同様，3世紀末か4世紀初めのゲルマン侵入時に[2]囲壁が築かれ軍事的拠点となったと推定される[3]．

ローマ帝政末期以後の衰退期に，カンブレーにおいても，他のローマ都市と同様[4]に，都市形成に欠かせない重要な要素は，キリスト教会，特に司教の存在である．ローマ帝政末期，カンブレーには既に司教館があった．しかし，6世紀前半にはアラスの司教区に属している．トゥールのグレゴリウスによれば，5世紀の半ばについて，フランク王クロディオはカンブレーに住むローマ人を打ち破り，占領した[5]と述べており，後の記録からも，彼らがキリスト教徒で居留地があったことがわかる[6]．

6世紀の前半，アラスの司教聖ヴァーストはカンブレーを新たに伝道する．その後継者の一人で重要な人物である聖ジェリは，584年から590年の間に，アラスからカンブレーに司教座を移した．彼の伝記によれば，聖ジェリはシテ内において異教徒の祭壇をこわし囲壁の外に[7]教会堂を建設した．そこに彼の死骸が埋葬され，少し後にこの教会堂は彼の名前を用い，この近くに一つの修道院が建設された．これらが suburbium に次第に発展する重要なサン・ジェリ大修道院の起源である．司教オベールは，669年頃同様にシテの囲壁の外に教会を建てた．司教座聖堂は，キヴィタス内部に6世紀半ば，建設されたと推定さ

* 史学研究室

れる．この聖堂近くにサン・クロワ教会が，7世紀には存在していたと考えられる[8]．

7世紀の初めには既に，キヴィタスは，司教座のある囲壁内集落を意味している．キヴィタスと司教について，7世紀の後半から8世紀の間，殆んど史料がないが，キヴィタス内の司教の支配権は，未だ不安定であったと考えられる．816年，司教ヒルドアルドゥスは皇帝ルイ敬虔王からキヴィタス内の教会所有地について最初のイムニテートを得た[9]．

843年のヴェルダン条約以後，カンブレーは，東・西フランクの国境に位置することになって，両主権者は，1世紀近くの間，その領有を争った．925年，ドイツ・ザクセン王家の創始者ハインリヒ捕鳥王の支配に属することになった．この間，ノルマン人がカンブレーにも侵入し，囲壁の不備のためもあり，彼らは容易に占領したと言われる．880年，ノルマン人によって，キヴィタスと suburbium のサン・ジェリ大修道院は焼かれた．これを契機に，司教ドディロ（Dodilo, 888--901年以後）のイニシャテイブで，キヴィタスの囲壁は強固に再建された．この時から，ギヴィタスはカストルム（castellum）とも呼ばれる要塞集落としての特質をも有する．この時機に，囲壁外のサン・オベール修道院をキヴィタス内部に合併することによって，囲壁は少し拡張された．この内部には，司教座聖堂，司教の公邸，サン・クロワ教会，教会参事会員の僧院と邸宅が存在している[10]．

9世紀にはシテはまだ国庫の所有地を有していた．記録が述べるエピソードによれば，863年にランスの大司教ヒンクマール（Hincmar）とその地方の他の司教達は，グントベルトとかいう人物の司教叙任時に，この好ましくない者にシテ内の皇帝に属する土地の使用収益権を許さないように決めて猛烈な反対をした．結局，これらの土地はこの司教に与えられ，彼の封地（beneficium）となった．カンブレーにおいても，司教権の任命が重い意味を持つようになった．941年，オットー1世によって，司教と教会参事会員はシテ内の市場税と貨幣鋳造所からの収入の取得を確認された．これらの特権の一部は既に認められていたと考えられるが，この時から，司教はシテ領域内の両特権のおよそ半分を，教会参事会員はその十分の一をそれぞれ認められたと推定される．この時点では，司教はまだシテ内のおよそ半分の支配権しか行使していない[11]．次に，カンブレーの他の支配者である伯について述べなければならない．

前述したように，フランクは5世紀の半ば頃にカンブレーを占領した．トゥールのグレゴリウスによれば，実在の王と考えられるクロディオはカンブレーに密偵を送り調査させて後，自らがカンブレーを征服した．彼は少しの間カンブレーに滞在後，更にソンム川に至るまでの領域を占領した[12]．次に出たラグナカリウスは，メロヴィンガーと同盟し，トゥールのグレゴリウスによってカンブレー王の称号を与えられているが，509年には，クロヴィスと戦い殺されている[13]．カンブレーはフランク王の支配地として合併された[14]．

クロヴィスの死後，カンブレーはソワソンの王国の一部となった．584年に，シルペリック1世は，兄弟との内訌に敗れて，カンブレーにソワソンから亡命してきた．この事実から，カンブレーは，失脚した国王と従者を保護するに充分な要塞化した囲壁とその内部に建造物を有していたと考えられる[15]．

7世紀末に編纂された記録によると，カンブレーは監獄を有していた．トリィブヌス（tribunus）と呼ぶ役人がこの監獄を監督していた．この人物は伯に服属して，特に囚人の取り締まりと監獄の維持を指揮した一種の警察役人であったと思われる．従って，メロヴィング時代に，カンブレーは国王の権力下にある伯の政庁所在地であった[16]と推定される．

しかし，9世紀末以前には，カンブレー伯の実在名は確認されない．実在が推定される最初の伯は，878年頃に伯職に着いた西フランク王シャルル禿頭王の義兄弟ボゾン(Boson)

である．896年頃にはフランドル伯の兄弟カンブレーのラウール（Raoul de Cambrai）が現われる．西フランク王シャルル単純王（893～923）がカンブレーの教会に対して与えた特許状から，アガノン以下4名のカンブレー伯の存在がはっきりと確認される．この中，活動状況が比較的明らかであり，916年以後カンブレーの伯として権力を行使したロタリンギア人伯イザク（Isaac）が注目される[17]．

この伯イザクの権力が及ぶ範囲は，カンブレーのシテとフォブールに限定される．王からの特権として彼が権利を有する所領や歳入は厳密に都市的な所領や歳入である．従って伯イザクは都市的権力者即ちシテの伯（Stadtgraf）であり，当時カンブレーのシテ自体は古い Pagus Cameracensis に由来する伯領を構成していたと推定される．このようなシテ自体が伯領を構成するという特殊な状況が出現した理由としては，カンブレーが，遅くともヴェルダン条約以後，カロリング王家東・西フランクの争奪地帯となり，重要な軍事拠点の支配者としての伯と伯領を主権者がここに設定したということが十分に考えられるのである[18]．

11世紀の半ば頃の記録によれば，10世紀の前半には，カンブレーの伯はキヴィタス又はカストルムの土地と歳入の半分を所有していたことがわかる．囲壁内のシテにおける領域の他の半分は司教の管轄であった．シテにおける司教と伯のこの「共同支配」（condominium）は10世紀の半ばまで続く．両者の関係は多数のトラブルを引き起こした[19]．一方，10世紀の半ば以後には，このシテの周囲に商人の定住区が明確に出現する．以下では，民衆である商人と手工業者の動向を主に述べる．

ローマ帝政末期，カンブレーは Bavai（Bagacum）を中心とする Nerviens 地方の主要なシテであり，バベェ，アラス（Nemetacum），ソワソン（Augusta Suessionum）を結ぶ商業路に位置している[20]．Nerviens 地方では，3，4世紀に織物工業が活発であり，外套が生産され，ディオクレティアヌスにより発布された価格表にも記載されている．当時，カンブレーはこの織物工業の重要な中心地であり，その製品は地中海東岸のシリヤ都市まで達していた[21]．又，4世紀のカンブレーの見事なガラス製品は，パンノニア，スカンディナヴィア，ロシア，更にアジアまで達している[22]．

これらの産業はメロヴィング時代にも完全には消滅しなかったと考えられるが，この間のゲルマン侵入の混乱期におけるカンブレーの商工業の動向を伝える記録は見当らない．しかし，メロヴィング時代に入って，8世紀の初めまで，南フランスとの遠距離商業は絶えなかった．8世紀初頭頃に起草された記録によると，コルビー大修道院の修道士はカンブレーで専業の商人からマルセイユ経由でもたらされた東方産の香辛料やパピルス，その他の諸商品を現金買いしている．コルビー大修道院は，657～673年，673～675年，716年にマルセイユ経由の東方産物の購入に際して市場税免除の特権を国王から獲得しており，カンブレーもマルセイユと頻繁な経済関係を当然持っていたと推定される．カンブレーのこれらの商人の中には，オリエントから来た一般にシリヤ人と呼ぶ者もかなり存在したと思われる[23]．

7世紀末に編纂された記録を主に判断すると，6，7世紀頃に，カンブレーは交通の要衝であり郊外に都市的一機能を有する宿場を形成していた．少くとも宿場としてカンブレーを利用したのは奴隷商人であった．彼等はゲルマニアやボヘミアの奴隷と地中海やドーバー海峡の港の輸入物資を転売する遠距離商人である．カンブレーからはドーバー海峡やパ・ド・カレーの沿岸地方に達するアミアン方面への道，地中海沿岸に達するソワソン――ランス――シャロン――トロワ――オーセール方面への直通路が走っていた[24]．

7世紀半ばから，9世紀には決定的に，遠距離商業の重心は北海，バルト海地方に移しつつあったと言われる．北海にそそぐエスコー河畔にあるカンブレーは，この河の下流にあるヴァランシェンヌ，トゥールネ，ガンと同様に，当然に北海貿易圏内の商業中心地を形成したと推定される[25]．しかし，カロリング時代に入って8世紀の商工業活動を伝える記録は殆んど見当らない．

だが8世紀半ばからシテ内の貨幣鋳造所で行われた貨幣鋳造は注目に値する．10世紀初めまでの鋳造貨幣は現存しており，ペパン短軀王，シャルルマーニュ，ルイ敬虔王，ロタール1世，シャルル禿頭王，ロトリゲンの王 Zwentibold（895～900）によって鋳造された貨幣はすべてカンブレーの名前を有している．貨幣は現存していないが，10世紀に，前述の伯イザクは司教と同様にこの貨幣鋳造所からの収入の半分の権利を有した[26]．

9世紀以後，フォブールにおいて多くの教会と2つの墓地の出現が注目される．シテの北に近在するサン・ジェリ修道院が核となって囲壁を有する自治的な小集落を形成していた．この集落には庭園，葡萄栽培地と同様に修道院の建物が広がっていた．この修道院の中には，8世紀頃から更に10世紀の半ばには明確に貨幣鋳造所が存在していた．シテ内やこの貨幣鋳造所などで働く手工業者は教会や修道院に服属する農奴であったと考えられる．この集落では又，聖ジェリの記念日に定期市が開催されていた[27]．

次に，カンブレーの都市的形成における司教，伯，商工業者の諸関係と三者の果した役割を司教に重点を置いて述べねばならない．

（3）

先ず司教と伯の関係について考察する．前述したように，10世紀の半ば頃まで，司教と伯はシテ内の諸権利を折半して行使していた．しかし，司教は皇帝の支持を受けて，伯のシテ内の所領と諸権利を手中に入れるように努めた．実際，権力を行使する過程で，この二人の共同の領主間に係争が生じたり，伯による暴力行為がなされたりした．これらの機会には司教は皇帝の権力に訴え，直接，間接の支援を受けて，伯権力を除去しょうとした[28]．

オットー1世は，ルイ4世に反乱した重臣達を押えるために，フランスへの遠征を企てた際，946年にカンブレーに自らあらわれた．彼はカンブレーにおける司教権力を強化することを欲しただけでなく，敵，特にルイ4世に反乱した領主達と内通した伯イザクの忠誠を欠く態度に報復することも欲した．オットー1世は，ドイツへの帰途中に，948年4月30日，エクス・ラ・シャペルで伯イザクと対抗関係にあったカンブレーの司教フュルベール(Fulbert 934～56)に特許状を手交した[29]．

この特許状によって，カンブレーの司教は，皇帝の支配下にあるシテ内のすべての財産とすべての司法権と共にフォブールのサン・ジェリ大修道院を譲渡された．サン・ジェリ修道院は司教の管轄下に入ったが，依然として少くとも地誌的には独立した構造を有したことが注目される．しかし，更に一層注目される事実は，従来紛争の的になっていたシテの半ばを占める伯領と伯の諸権利が以後司教に譲渡されたことである．即ち，司教によって伯権（comitatus）が保有されるに至った[30]．

従って，948年以後，司教は伯の権力を除去することに成功した．彼はカンブレーの都市領域の伯になった．以後，司教は都市領主（Stadtgraf）としてカンブレーのシテを支配する[31]．カンブレーのシテ（キヴィタス）は司教都市としての特質を有するに至った[32]．

司教の権力は948年以後伸展していったが，内外に困難な政治状況を有してもいた．司教はシテ内の王権に属す権力の行使を家臣である城代（castellanus, châtelain）に委任した．

972年の記録に初出する城代は早くも司教と対抗している．城代は特権として都市的な利益を有し，サン・ジェリ修道院の家臣としても認められていた．多くの他の司教都市と同様に，司教と城代の対抗関係は，10世紀以後続行し，時には激しい闘争となった．11世紀半ば以後，司教と城代の内紛と城代の圧政はコミューン運動の一因ともなった[33]．

非常に多くの領主やカンブレーの騎士も，10，11世紀の間，司教に対立し，強襲，略奪，汚職，横領が行われ，戦乱になることもあった．これらの不安定で暴力を伴う動向は，この時期のロタリンギアの政治状況と関係していた．皇帝を代表している司教（カール派，Karlensibus）とカペー派(Capetiis custumiis）の浸透したロタリンギアの領主達との間には対立は明白であった．又，司教は家臣である騎士たち（milites ecclesiae, casati）を従えていた．11世紀の終りまで，これらの騎士は ministeriales で，キヴィタスの守備隊であったと考えられる．しかし，司教と彼らの関係も決して安定しておらず，常に対立，紛争を引き起した[34]．

953年に，ハンガリア騎兵の一部隊がカンブレーのシテを攻撃した．シテはその囲壁によって抵抗し勝利を得たが，フォブールのサン・ジェリ修道院は焼かれた．この事件の数年後，958年にシテ内に暴動が起きた．約一世紀後に書かれた記録によれば，キィーヴェス（cives）は司教[35]の不在を好機に徒党を組んで彼の帰途に際してシテへの入城を禁じた．事件を知った司教は，ケルン大司教とフランドル伯の援軍を願ってそれに伴われて，入市を計った．キィーヴェスは恐れをなして降伏し，司教は抵抗を受けずにシテに入城した．司教の復讐はきびしかった．司教は軍事力の援助を確保すると，不意にキィーヴェスを攻撃した．彼らはサン・ジェリ修道院に避難したが，司教の兵士は追撃し，彼らを虐殺した．キィーヴェスの反乱は失敗に終わった．しかし，この反乱を起こしたキィーヴェスの主な実態は商人たち住民ではなく，司教の庶務的な機能を委託されていた，いわゆる騎士ではない ministeriales である．記録者が反乱者をキィーヴェスと慎重に呼んだのは，司教の ministeriales である milites servientes と特に区別することを欲したからであると考えられる[36]．

しかし，司教の権力はこれらの多難な政治状況を乗り越えて強力になり拡大していった．977年，991年，1003年にそれぞれ3つの特許状が皇帝からカンブレーの司教に手渡された．これらの特許状によって，司教の権力はますます都市的になっていったと考えられる．1007年，皇帝ハインリヒ2世はカンブレーの司教にカンブレーの伯領のすべてにおける伯権を認めた．948年以来，司教はシテにおいて既に伯権の保有者であったから，この特許状により，司教の権力はシテ外のカンブレーの領域に拡大したと考えられる[37]．

10世紀の半ば以後，カンブレーにおける商人定住地は明確に出現していた．1001年に手渡されたオットー3世の特許状によれば，カトー・カンブレジ（Cateau-Cambrésis）の市場を利用する内外のすべての商人は同じ平和を享受し，平和の違反者には罰金が課される．1003年の特許状にも同じ事頃が規定されている．10世紀の末になると，カンブレーの商人の人口が一段と増加し，彼らは特別の保護を受け特に身体，財産の法的保護を充分に享受したと考えられる．「市場」は都市形成力を持たなかったにしても，カンブレーにおいても「市場平和」（marktfriede）の顕現が見られる[38]．

カンブレーの商人と手工業者は，キヴィタスの suburbium の中に，特にシテ囲壁の北，既存の2つの要塞集落であるシテとブールのサン・ジェリの間に定住した．11世紀初めにはこの空間は彼らの住居によってほとんど完全に密集地帯となった．1027年にシテを荒廃させた火災によってサン・ジェリ近くの住居までもが類焼したことは，この密集状態を

証明するであろう．この同じ suburbium には，11世紀中に，ここに新しく定住した人々を管轄する多くの教会も建造された．即ち，11世紀初めにサン・マルタン，1050年頃サン・タンドレ，1064年にサン・セピュルクル，1051年から1076年にサン・ニコラがそれぞれ建てられた．これらの諸教会は，その庇護する聖人名と建造の日付けによって，商人的起源をわからせる[39]．

11世紀の半ば頃になると，カンブレーの商人の実在名が記録に繁出する．彼らはその富と洗練された判断能力のために，シテ内外で名声を享受している．更に，この時期にカンブレーに定住している多くの商人や手工業者が充分知的に訓練された．この知的で活動的な人々はやがて司教に反抗してコミューン運動を展開することになる．又，11世紀の末までには，商人の定住地に，大市場，市役所，肉屋，毛織物取引所，物見櫓の出現が確かめられる[40]．

次に，司教がカンブレーの都市的形成に果した具体的な役割について述べねばならない．先ず，司教のイニシャティブによるシテの囲壁の拡張と補強，防備施設の充実があげられる．これらの事実には2つの動機が働いていると考えられる．即ち，人口の増加，次に防禦を充分に確保する必要性である．人口増加のために，司教リエトベルトゥス（Lietbertus, 1051—76）は，シテの囲壁を拡張し，フォブールにあった商人と深い関連のあるサン・セピュルクル教会をシテ内に包含した．当然この教会の管轄下にある周辺の商業集落も同時にシテ内に編入されたと考えられる[41]．このような事実は，司教によって幾度か或いは商人達によっても行われ，シテは繁栄していったと推定される．司教らによって作られたこの新しい囲壁は全く初歩的なものであり，既存の壕の周囲にめぐらした防禦柵であった．木を石で取りかえ，多くの塔の建立によって囲壁を補強したのは，リエトベルトゥスの後継者，司教ジェラール2世（Gérard Ⅱ, 1076—92）である．彼は又，10世紀以来 castellum の特質を有した古いシテの防備施設を修繕し，改良するのに務めた[42]．

更に，11世紀の間に，司教達によって司教座聖堂の改築やその他のシテ内の建造物の維持，改良が行われた．先ず，1023年に，司教ジェラール1世（Gérard Ier）は古い司教座聖堂ノートル・ダムを取壊わし，大建造物への改築に着手した．この工事に必要な材料を得るために，彼はシテ近くの石切場を採掘させた．1000年頃，司教エルルアンは司教公邸を豪華に再建し，一方，彼の示唆によって，副司教はシテ内のサン・オベール修道院を拡張し，修復した．この修道院は1066年に改革されて豊富に補助金を与えられた．諸教会以外に，シテの主要な公共大建築物には，監獄，サン・クロワ教会の墓地近くにある施療院，諸学校があった．これらの施設は司教達の努力によって充分に栄えていたと考えられる[43]．

司教は又，支配組織をかためるために教育者，学者の養成と彼らの人材登用をはかったと考えられる．ランス大司教，ローマ教皇となった著名な学者ジェルベール（Gerbert）の弟子である司教ジェラール1世（1012—51）の時代になると，学校の教育者が記録にとどめられている．11世紀半ばには，学者は重要な聖職者の高位高官の者として現われ，シテ内の行政機能をはたしている．彼らは又特許状の中で証人として引用され，時には起草者として示されており，司教管区の司法，立法にたずさわる役人として登用されたと考えられる[44]．

11世紀の初めから最後の四半世紀まで，司教ジェラール1世とリエトベルトゥスが支配者としてカンブレーのキヴィタスを繁栄させたことは否定出来ない．『カンブレー司教伝』は当然これらの司教を称讃し，リエトベルトゥスの伝記作者はカンブレーのシテを人口の多い（populosa）豊かな（opulenta）ものにしたという事実を彼の超人的英雄のせいに

する[45]．しかし，これらの司教が活躍し得る歴史的な基盤は長い期間に形成されて存在するに至ったといえる．

（4）

これまでに，コミューン運動期までのカンブレーにおける都市的形成力を有した三要素である司教，伯，商工業者の諸関係と役割を述べた．これら三者のうち，古い起源を持つ支配者である司教の権力がカンブレーの都市的形成に果した役割を特に注目せざるを得ない．カンブレーのシテは古くから司教座を有し，10世紀初めには司教はシテを強固な要塞集落とした．948年に司教が皇帝の支持を受けて他方の支配者である伯の権力を除去しシテ内の都市領主となったことは画期的である．以後，カンブレーのシテは司教の一元的な支配を受けそれなりに繁栄する．10世紀半ば以後，明確に出現していた suburbium の経済力を有する商人定住地も，11世紀半ば以後になると，司教らによって漸次シテ内に包含されたと推定される．一方，suburbium の古いサン・ジェリ大修道院と付属集落の存在も注目しなければならない．この修道院はその自治的な要塞集落内で農・工業活動を行い，suburbium に発展した商人定住地とも当然関係を有したと推定され，又，948年以後司教の管轄に属するが，コミューン運動期にも少くとも地誌的にはシテとは独立しているからである．しかし，コミューン運動期までのカンブレーは，シテが概ね中心をなしており，シテの支配者であり，suburbium にも支配力を拡大しつつあった司教の権力の主たる都市的形成力を否定することは出来ない．

注

1. 守山記生：「形成期フランス・コミューン都市の軍事的特質について――フランス封建王政との関係をめぐって」奈良大学紀要第2号，昭和48年．
2. ベルギカ第二州の首府ランスやソワソンを参照せよ。 F. Vercauteren, Étude sur les civitates de la Belgique seconde, Bruxelles, 1934, pp.37—38, p.107.
3. Ibid., pp.206—207.
4. 弓削達：「後期ローマ帝国における都市の構造的変質」古代史講座第10巻，昭和39年，313—317頁 宮下孝吉：『西洋中世都市発達の諸問題』昭和34年，11—12頁． R. Latouche, Les origines de l'économie occidentale (IVe—XIe siècle), Paris, 1956, pp.121—124（宇尾野，森岡共訳『西ヨーロッパ経済の誕生』昭和45年，137—139頁）．
5. M. G. H., Scriptores rerum Merovingicarum Tom. I Gregorii Episcopi Turonensis historiarum libri X（兼岩，臺訳『歴史十巻（フランク史）I』昭和50年，113頁）．
6. Vercauteren, op. cit., pp.207—208.
7. この事実は地誌的にも重要であり，初期の都市において一般的である。瀬原義生：「ヨーロッパ中世都市の起源(二)」立命館文学，昭和474年，321号，208—209頁及び「同(三)」同上，昭和48年，334・335号，237頁を参照．
8. Vercauteren, op. cit., pp.208—209.
9. Ibid., p.220.
10. Ibid., pp.214—215.
11. Ibid., pp.215—216, pp.220—221.
12. 前掲，『歴史十巻（フランク史）I』113頁，510頁の註90.
13. 同上，139頁，175—177頁．
14. Vercauteren, op. cit., p.209.

15. Ibid., pp.209—210.
16. Ibid., p.210.
17. Ibid., pp.217—218.
18. Ibid., pp.218—219.
19. Ibid., pp.219—220.
20. Histoire de la France, vol.I, publ. par G.Duby, Paris, 1970, pp.112—113.
21. Vercauteren, op. cit., p.206, p.441.
22. M. Deanesly, A history of early Medieval Europe, London, 1974, p.125.
23. Vercauteren, op. cit., pp.210—212, pp.445—447.
24. Ibid., pp.212—214. 尚，7世紀頃のカンブレーの人口は1,500人程度と推定され，アミアン（約2,090人），ソワソン（約2,080人），トゥールネ（約1,896人）とそれほどの大差はない．ランスは約5,800人で群を抜いている．（Ibid., pp.359—360）.
25. 瀬原義生，前掲論文(3)，238—239頁.
26. Vercauteren, op. cit., p.217.
27. Ibid., pp.216—217.尚，フェルカウテレンは，「サン・ジェリ修道院がシテの南東に近在する」と述べているが，これは明らかに誤りである.
28. Ibid., p.221.
29. Ibid., p.217, pp.221—222.
30. Ibid., pp.222—223.
31. 司教によるグラーフ職の獲得は，カンブレーとほぼ同じ時期に，メッツ，ロレーヌのトゥール，不完全な形態ではあるがヴェルダンにも見られる．瀬原義生，前掲論文(3)，255頁，256頁，260頁．伊藤栄:「西ヨーロッパにおける古代都市から中世都市への転換」国学院経済学第17巻4号，昭和44年，34頁，40頁.
32. Vercauteren, op. cit., p.223.
33. Ibid., pp.224—225. 前掲守山記生，91—92頁.
34. Vercauteren, op. cit., pp.224—225.
35. Engran (H. Pirenne, Early democracies in the Low Countries, New York, 1963, p.29) とも，Bérenger とも言われる.
36. Vercauteren, op. cit., pp.225—228.
37. Ibid., pp.223—224.
38. Ibid., pp.228—229.
39. Ibid., pp.229—230.
40. Ibid., pp.229—230.
41. 従って，前掲守山記生（90頁）の「シテ内の商業集落」は，11世紀半ば以前においては，「シテ近辺の商業集落」と地誌的には考えるのが妥当である.
42. Vercauteren, op. cit., pp.230—231.
43. Ibid., p.231.
44. Ibid., pp.231—232.
45. Ibid., p.232.

Summary

The early urban history of Cambrai before the communal movement in 1077 is considered in this article. During this period it cannot be denied that the history of Cambrai was chiefly determined by the episcopal powers of old origin. Especially it is epoch-making that in 948 the bishop Fulbert succeeded to become "Stadtgraf" in the whole "cité" under the support of the Emperor Otto I. Since then until the period of the communal conflict, Cambrai was an episcopal city in which bishops dominated their rich merchants and artisans, and it was wholly prosperous as the center in the "cité."